

翌朝目が覚めるとバスターミナルに向かった。理塘では数日過ごすつもりだったので急ぐ理由もなかったが、民間の長距離バスを乗り継いで移動する貧乏旅行者にとって、その街のバスターミナルは重要な場所であり、まずは押えて置きたいポイントなのだ。康定に向かうバスが何時に何処から出るのか、チケットは幾らかなど必要事項の確認を済ませると売り場の壁に大きく描かれているバスの路線図をゆっくり眺めた。

理塘から東の方向へ向かうのは私の帰路となる康定行きのバスだが、南の方向に向かう郷城^{シャンジャン}行きのバスに乗れば、旅行者には人気が高いが私は未だ訪れた事の無い、憧れの雲南省に抜ける事ができる。西に向かうバスに乗れば、到着点の巴塘^{バータン}は正真正銘のチベットエリア、チベット自治区の目と鼻の先^{ガンゼ}だし、北を目指せばカム北部の中心地のひとつである甘孜^{ヘルタ}、その奥には色達^{セルタ}という土地があり、その付近にはチベット仏教宗派の一つである、ニンマ派によるチベット最大級の僧院があるのだという。成都で知り合った日本人旅行者の持っていたガイド本には、まるで一つの大きな街ほどの規模で形成された、寺の要塞の様な僧院の集合体がカラー写真で紹介されていて、私は驚きに目を奪われたものだ。そんな私がまだ見ぬチベットの奥地には、きっと下界に暮らす私達の想像を超えたディープな世界が広がっているに違いない

ああ～～、このままずっと、旅が続けられたらいいのに～～！！何処の土地に旅していても旅の折り返し点を過ぎる頃になると、必ず感じる事となるやるせない想いを飲み込んでチケット売り場の建物から出た私は、朝食を取る為にバスターミナル脇に軒を並べている食堂の一軒に入った。

ガラス戸にペンキで書かれている漢字のメニューから「〇〇鍋豆腐」といった料理名を見つけて注文し、料理が出てくるのを待っていると、一人の西洋人旅行者の男性が店の表で売っていたホットケーキのような形のチベット・パンを数枚購入し、それを炭火で焼いて暖めてくれと頼んでいた。店の店員達は英語を解さず、話が伝わらずに四苦八苦している男性を見かねた私が横から通訳の合の手を入れると、ヤレヤレ……というような顔をしてみせた彼は両手を胸の前で差し上げ「中国は英語が通じないから旅も大変だ」と苦笑いをした。パンを焼いている間に話をしてみると彼はアイルランドからやってきた旅行者で、四川の旅では食事が合わずに苦労しているのだという。

「俺はベジタリアンだし、中国語も解らないから何を食べてもいいのか判らなくて、毎日三食このパンだけを食べているよ」

「ええー、だって野菜の包子とか、スープとか、豆腐料理とか、ベジタリアンでも探せば美味しい物はいろいろあるわ！」

「中国語のメニューは全く解らないし、以前に点心のような物を食べてみたら腹を壊したんだ。もうゴメンだよ」

だが彼が毎日食べているというチベット・パンは私も以前食べてみた事があるのだが、どうにもポソポソでカチカチで、それを常食にしているチベット族の人には申し訳ないが、ちょっと美味しいとは思えない物だった。

「俺だって美味しいと思ってる訳じゃないが、パンならとりあえず安心だし、ただ腹を満たす為だけに食ってるのさ」

ええ～～、せっかく外国に来て珍しい食べ物を試してみるチャンスに恵まれてるのに、何て勿体無い事を～～～！

でもそういえば……以前マレーシアのジャングルにトレッキングに行き、その場で知り合った西洋人旅行者とグループを組んで数日過ごした時の事を思い返してみれば、彼等の食生活もずいぶんと保守的だった。

食堂に行けば美味しいマレーシアのローカルフードが溢れているというのに、彼等が好んで毎日食べていたのはハンバーガーとフライドポテトにコーラで、未開の味に挑戦してみようという気持ちなどあまり起こらないらしい。そういえば日本に滞在している各国の外国人を思ってみても、一部を除いた殆どの国の国民はやはり毎日自国の食べ物食べているようだ。

それに比べて世界中の味が集結しているような東京の繁華街を思い浮かべてみれば、中華、フレンチ、イタリアン、インド、アジア各国のエスニックにトルコ、アフリカン……等々、もしかしたら日本人ほど食に対する好奇心が旺盛で他国の味を積極的に許容する人種は、世界中でも珍しいのかもしれない。そんな事を思っているうちに私の頼んだ料理が運ばれてきた。名前から想像した通り、熱々に焼かれた土鍋の中で豆腐や野菜がぐつぐつと煮こまれていて、とても美味しそうだ。

話しているうちに親しみが湧いてきたのか、アイルランドの男性も持ち帰ろうとしていたパンと一緒に座

って食べ始めた。取り皿を貰い、私のところに運ばれてきた鍋の料理を「豆腐と野菜だから試してみて」と勧めるとかなり気に入ったようだ。

「こんな料理があるとは知らなかったよ」と言う彼に、ガラス戸に書かれている料理名を彼の手帳に写し取り「今回はこれを食堂の店員に見せて注文すればいいよ」と言うと、ナイス・アイデア!と笑顔で親指を立てた。

食事が済むとアイルランド青年は店を出て行ったが、私にはもう一つの目的の為まだ店に居残っていた。今日の予定は何といっても、昨日北京軍団の車中から見かけた岩山である。実は三年前の旅でも烏里氏に伴われチラッと訪れていた場所だった。

なだらかに続く高原の中に突然又ツと地面からせり出してきた様な石灰岩質の岩山全体には、そこが神の場所である事を示すタルチョがグルグルと巻きつけられていて、只でさえ岩山好きな私の目を惹くのだが、更に面白いのは岩山の中腹辺りの側面に洞窟が口を開けているのだ。この岩山の内部には鍾乳洞があり、山の裏手から洞窟の入り口によじ登ると迷路のように枝分かれしたトンネルを進んで、岩山の表側に顔を覗かせる事ができた。分岐している洞窟の内部には神への捧げ物なのか水牛のドクロが安置されてあったり、そこに住みついたコウモリの糞が山のように堆積している部屋があったり、何処まで通じているのか判らないようなトンネルが岩山内部に延びていたり、とにかくこの山は怪しく秘密めいていて面白い。

あまり人には理解されないが、私はバイクで日本のアチコチを旅していた時代に旅先でたまたま入った鍾乳洞の不思議な魅力に取り付かれ、その後は各地の鍾乳洞を求めてバイクで九州やら東北やら本州の端から端まで走り回ったほどに鍾乳洞が好きなのだ。そんな私が何の予備知識も無くそんな場所に連れられてきて狂喜しない筈が無い。早速岩山を駆け上がり洞窟の中を進んで表の岩盤から顔を出しヤッホーと叫んでみせたが、私以外のメンバーはそれほど岩山にも鍾乳洞にも心を動かされていない様子で、そこは団体行動の悲しさ故、すぐに「では行きましょう」とその場を後にしなければならなかったのだ。引きずられる様にマイクロバスに押し込められ、この地を去ってゆく私は大変に大変に不満だった。

そう簡単に来られる場所じゃないんだから、もっとじっくり探検したかったのに〜!!!とにかく一度気になってしまうと、自分の心行くまでそれを味わいつくさなければ納得のいかない私は、その日のバスの中

で心に誓っていたのだ。「いつか絶対、一人でこの場所に舞い戻ってきて、好きなだけこの岩山で遊んでやる――!!!」

だが四川省二度目の旅となる今回、心に刻んだ誓いは北京軍団によってくだんの岩山に気付かされるまでスーッカリ忘れていた全く際どい一瞬であった。あのまま車の中で居眠りしていたら、その事は忘れたまま日本に帰ってしまったに違いない。何だかんだ言いながらも北京軍団には感謝感謝である。だが、問題なのは街から離れた高原の真ん中にニョッキリ聳えているあの岩山まで、どうやって一人で向かえばいいのか…、私がまず思い浮かべたのはバイクだった。それまでに数え切れない程出会っていた、チベット版エージーライダー達が長い髪をなびかせながら気持ち良く高原の道路を飛ばしているのがとても羨ましく印象的だったからだ。

道は一本道なので、バイクさえあれば誰でも迷う事無く岩山まで走っていける。この何処までも続く大草原の中を風を切って…これだけバイクが普及している理塘の街だ、泊まっている宿の従業員や街のバイク屋などに相談してお金さえ払えばバイクをレンタルする事など容易な気がした。バイクがあればあの岩山だけじゃなくて、もっと色々な場所に縦横無尽に走っていける…

自分の思いつきに思わずウットリしてしまった私だが、冷静に考えればやはりそれはあまりにリスクの高い行為だった。理塘は標高が4000メートルにもなる高原地帯なのだ。天気が良ければいざ知らず、ひとたび天候が荒れれば夏でも雪やヒョウが降ってくる。亜丁村で少年のバイクを倒して壊してしまった事を思えば、舗装状況も良くない道路で同じ様なアクシデントが起こる事は容易に予想されるし、カーブの道でもなりふり構わずスピードを出して飛ばしまくるこの土地の人間の運転を思えば事故も怖い。どの程度手入れされているか判らない中国製のバイクの精度も心配だ。もし街から遠く離れた場所でバイクが故障でもしたら、日本のように手近に駆け込めるガソリンスタンドなど皆無だし、そのまま外で一晩過ごす事にでもなれば氷点下にもなる気温は命にかかわる。

うーん…夢から現実に引き戻された私が次に考えられる方法は、やっぱりタクシーしかなかった。昨日北京軍団の車から岩山を見た時は、その後わりとスグに理塘の街並みが見えて来た筈だから、それ程遠い場所ではないだろう。

いきなり街を流しているタクシーに交渉する前に、

あの岩山までタクシーで行けばどのくらい時間がかかり料金の相場は幾らくらいなのか、どこでタクシーが拾えるのか、まずこの土地の人間に聞いて確かめたかった私は、明るい笑顔で気の良さそうな食堂の女将の手が空くのを見計らって声をかけてみた。女将の話では、岩山は扎嘎(サガ)神山と呼ばれているらしいかった。

「そこまでタクシーで行きたいと思ってるんだけど…」

私がそう言いかけたとたん、店の奥にいた小柄な男が勢い良く駆け寄ってくると「俺が連れて行く！俺のタクシーに乗ってくれ！」と私の前に飛び出してきた。

「いくら？」

「80元！」

旅行者だと思って足元を見ているのが見え見えだ。

「高〜い！！お話にならないわ！」

私がそっぽを向くと

「70元！いや60元でもいい！」

必死に喰いついてくるタクシーの運転手を横目で見ながら、私達のやり取りを苦笑して眺めている女将に向かって「そんなにしないでしょー！？相場はいくらなんですか？」と訪ねると、女将は笑いながら

「友達に電話してあなたを乗せてくれるか聞いてあげるわ」

と受話器を取り上げた。

慌てたのは運転手だ。

「待ってくれ！50元、いや40元！」

電話が繋がって女将が友人であるタクシー運転手と話し始めた。

「いや、30元！！20元でもいい〜〜〜！」

まるでバナナの叩き売りだ。よっぽどお客が欲しいのか頭を抱えながら悲鳴のような声をあげているのが可笑しくて思わず笑ってしまったところで、女将の電話が終わった。

「私の友達は今、手が空いてないそうなの」

俄かに元気を取り戻した運転手は

「小姐！やっぱり俺の車に乗るしかないな！」と強気な笑顔で勢いを盛り返してきた。何だか憎めない人物で、この男の車にのっても良い気がしてきた私は

「いいわ、20元よね」

念を押すと、

「いや30元だ」と言い返す。

「あなた、たった今20元でいいって言ったじゃない！」

呆れながら声をあげる私に、また大げさに頭を抱えて見せる運転手を笑いながら店の女将が助け舟を出した。

「小姐、30元なら良いわよ。この辺の人間が乗ってもあそこまでは30元よ」

女将の一言で交渉が成立すると、準備をしてから此処に戻ってくるからと約束して私はいったん宿に戻った。出かける為の荷物をまとめて宿の廊下を歩いていると、もしや日本人ではないかと思われる青年が廊下にいるのに出会った。あ！彼も誘ってみようかなー、人数が多い方がタクシー代も安く上がるし、街の郊外に向かうタクシーに女一人で乗るよりは仲間がいた方が安心だ。久しぶりに自由に会話できる自国の人間と話したい気分にもなっていた。青年と目が合うのを捕らえようと暫く廊下で所在無くしていた私だが、どうやら彼は意図的に私の視線を避けている様子で声をかけるキッカケが掴めない。面倒になった私はやはり一人で宿を出た。

歩いて数分の場所にある先ほどの食堂に戻ると、約束どおり運転手は車を準備して待っていてくれた。理塘の高い高い空は相変わらず抜ける様な群青色だ。走り出した車はスグに街中を抜けると左右どこまでも緑の絨毯が続く草原の真ん中を車はすべるように走っていく。美しい風景、明るい日差しに気持ちが高揚してくる。やっほー！！三年前の想いを果たすべく思い出の岩山リベンジに出発だ〜〜〜！！（次号に続く）